

対 談

医師として,市長として, そして患者として.



熊坂義裕先生

医師・元岩手県宮古市長

田中 拓先生

川崎市立多摩病院救急災害医療センター センター長

医師から市長に

田中 拓 今日には医師であり、かつて岩手県宮古市の市長を務められた熊坂義裕先生にお話を伺います。市長というのは医師だけの立場ではなく、さまざまな分野に関して目を配らなければならないわけですが、地域の中で医療というものをどのように存在させていたのか。当時も宮古市は地方都市として医療の問題をたくさん抱えていたと思うのですが、市長として医療はどういう位置付けだったのか。医療者の立場としては、医師である先生に行政の中で医療を支えてほしいと考えるわけですが、そこに対して先生がど

ういうアプローチをされていたかというのを、まずお聞きしたいと思います。

熊坂義裕 非常に核心的な質問ですね。私が市長を務めていたときに全国市長会の中に「医家市長会」というのがありまして、医師免許を持った市長が10数人いました。でも行政職や病院の経営者から市長になった人が多く、私のように実際に医療業務に専念した後に市長になったという人は少なかったですね。私の場合はそれまで大学病院や県立病院の医師、そして開業医として医療の第一線でやってきました。市長に立候補できたのは、後輩が私の後を継いでくれることが分かったからです。市長は片手間にはできませんから、自治体の首長をやる以上は、医者

をやめて100パーセント全力投球しようと思いました。

では、なぜ市長になろうと思ったかという、私は33歳で弘前大学の医局を辞め、縁があって家内の故郷の宮古市の県立宮古病院に勤めました。それまでは大学で研究を続けていました。住むからには地域の皆さんと交流したいと思い青年会議所に入りました。青年会議所というのは地域づくりの活動をしていますから、理事長もやりましたが、宮古市にもいろいろな問題があり、特に医療・福祉環境がとても厳しい状況にあることが分かりました。例えば在宅福祉サービスの三本柱といわれる、ホームヘルプ、ショートステイ、デイサービスが、岩手県59市町村(当時)の中で宮古市は最下位でした。それから医師もかなり足りない。岩手県は自治医科大学卒業生の先生が大変活躍されていましたが、県立宮古病院でも30人ほどの医師のうち自治医大の卒業生が10人ほどいました。医師不足は何かしなければならぬし、福祉も駄目、産業も厳しいという中で、「豚もおだてりゃ木に登る」という感じで市長選に出て、45歳で市長に就任しました。当時、東北地方ではいちばん若い市長でした。

医療というのはエビデンスに基づいてやっていますが、エビデンスに基づいて行政をやっている政治家はあまりいなかったように思います。市政にもエビデンスを大事にする、データに基づいてやっていくという手法を導入しました。政治家も職員もみんな頑張ったというけれども、頑張った結果がどうなのかが分からなければ駄目であり、結果を数字にして出そうと考えました。

田中 見える化ですね。

熊坂 そうです。見える化です。ところが、若いし元気だったのでやりすぎて、職員が少し疲れてしまった(笑)。私は平成9年に市長になったのですが、平成14年に日本経済新聞社の全国市行

政改革度ランキングが発表になり、宮古市の行政改革度は、人口10万人以下の429市の中で1位でした。いかに私が厳しかったかというのが分かりますよね。でも在任12年間でいろいろな議案や条例案を出しましたが、議会に1回も否決されたことがないんですよ。根回しがうまくいったんですね(笑)。

田中 普通はどんどん改革を進めると周囲の反感を買いますよね。それでも自分の信念を貫いていく。そして議会でも反論を受けないような根回しをする。そのへんのコツというのを伺いたいです。

熊坂 私の診療所は開業して4年目ぐらいに県内の内科診療所で、患者数(レセプト数)がトップクラスになったのですね。議員も結構患者でしたから、知り合いが多かったというのもありますね(笑)。

田中 なるほど。普段から顔が見える関係だったわけですね。まさしく地域というのはそういう絵が描けないといけないとっていて、それは都会ではできないことですよ。

熊坂 県都盛岡市から宮古市までは当時は道路の距離にして約90キロ離れていました。東日本大震災後に高規格道路が整備されて約70分で行けるようになりましたが、当時は2時間ほどかかっていました。だから、宮古市はある意味独立国なので、当時はかなりのことが市内で完結していました。その市長なので独立性が強いわけです。雨が降っても嵐が来ても市長が悪い。景気が悪くても市長が悪いし、給料が上がらないのも市長が悪いのです(笑)。一方で権限が強く、やろうと思ったらいろいろなことができる。そういうやりがいがある過疎の地方にはあると思います。

医師不足の中で、医師であることが役立ったことがあります。県立宮古病院の産婦人科は当時東北大学の医局から医師2人が派遣されていましたが、私が市長になって4年目ぐらいのと